

復讐奇談 鰐和尚實記

121



榮泉堂梓

091559-000-4

特43-121

鰐和尚實記

榮泉堂

M19

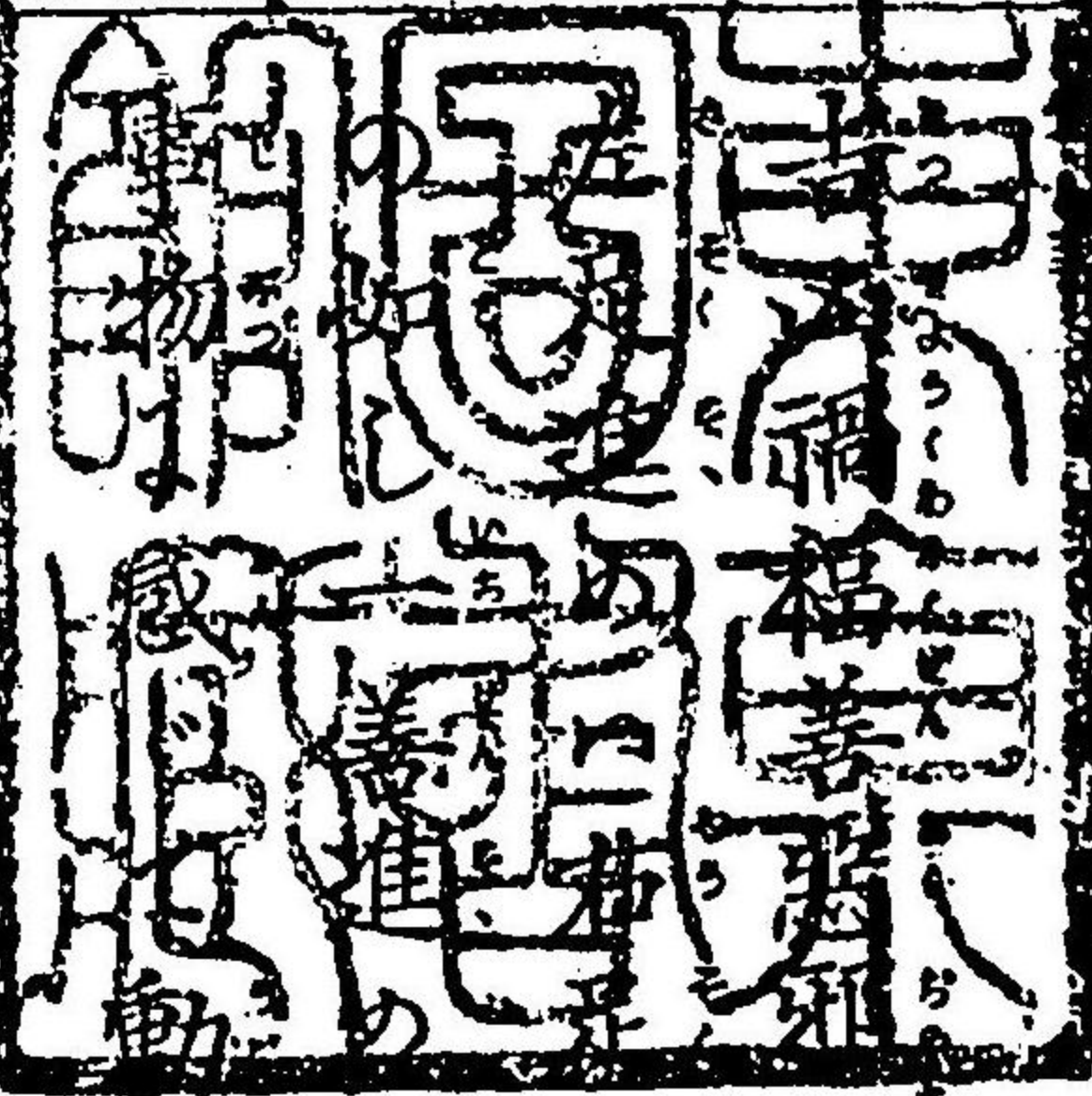
DBN-2558



明治十九年十二月六日 内務省交符 1881

特43121

復讐 鰐和尚實記序



正の甚相遠るを是を左右の足は譬ふ
止り右足進め左足止る善惡も亦かく
の衆惡退き百福来まひ百難止む人心の
た動く萌す一念爰は起るとたひ善よも

なるべく惡にもなるべく禍福吉凶招くは隨ふ一進一止
善惡必報竟は脱るべららば卷中鰐和尚才吉の如き其才
を善よ用ひをして己の情欲を逞ふせんか爲に惡よ用ひ
惡名を千載の末は殘す豈遺憾をらまや余此草紙を編す

復讐 鰐和尚實記

奇談魚舟傳言



海鏡



十代繪本
新編
御成吉思汗
御成吉思汗



御成吉思汗
御成吉思汗



五

る因を推し果を談じ専ら勸善の一端と一普く懲惡の一助となさんとす是を讀む兒童達能く警誡し迷津の筏となさの幸甚のみ

明治十九年十一月

榮泉堂主人誌

從響 奇談 和尙實記

目錄

卷之壹

- 一 旅籠屋夫婦子を死と悲む事
- 一 并女房神に祈つて奇童を生む事

卷之貳

- 一 神意は違つて權右衛門禍を求むる事
- 一 并石山の與母才吉異人に逢事

卷之參

- 一 才吉山に入て劍術を練事
- 一 并才吉奸智衆人と驚らす事

卷之肆

一色いろに迷まよひ半次命はんじいのちを落おとす事

并死骸しがいをさづさへ才吉大金さいきんを貪むさぼる事

卷之伍

一娼婦しやうふ初花父はつはちちの仇あだを報はらむ事

并才吉難状さいきんがた恐おそく勢州せいしゅう母走はしる事

卷之陸

一才吉江中さいきんがなかつに鱈たかを伐きる事

并鱈和尚たかおしょう誤あやまして獄中ごくちゆうに陥おちる事

卷之漆

一獄屋ごくやを破やぶつる三州しゅうに走はしゆ事

并鱈和尚たかおしょう大おほひに衆僧しゅうそうを救あまゆる事

卷之捌

一才吉さいきん即智斑ちくはん馬うまを得うる事

并賊主頭ぞくしゅとう梁りやうの任にんを鱈和尚たかおしょう母護もごる事

卷之玖

一番婦ばんぶの毒舌どくぜつ豪家ごうかを救あまゆる事

并才吉さいきん深夜しんや江尻えじりを鬧さわぐ事

卷之拾

一姉あねを尋たづねて助市すけいち江州えしゅうに至いたる事

并助市すけいちが勇鱈ゆうたか和尚等おしょうらうらうらを討うつ事

惣目録畢

奇談 和尙賢記

○卷之壹

旅屋夫婦子あきを悲しむ事

女房神お祈つて奇童を生む事

夫人も萬物の靈に然るは孔孟の聖賢盜妬が暴惡其人たるの違へる所雲泥
 萬里なるもこま物の止べうらざる所あり爰は説出は重惡の賊話も少しく
 勸善懲惡のむしともあらん寛永年間の頃うとよくじらとる近江の濱の名
 ましおふ石山寺の秋の月三井の晚鐘矢ばせの歸帆名所もおふきその國の
 大津の里と聞へしは人家軒あらびこけら雲に入りて行人馬蹄をやすを
 して朝より夕べよいとるまでその繁榮もいゝるむかり爰は久しき山城屋權
 右衛門とて一軒の旅店あり元來權右衛門は京都の生れふて有たるがいつ
 乃頃よりこの所より来りて旅客をとめくすごといをふけるが日々夜々

小繁昌して席上には万客むらがり門前には驛馬いなると貳十余人乃男女
 を手あしのどくよしてあふ不足あくるる妻の同里の何某がもと
 よりむかへたるが兩全を得がたき世のまらひまら妻嫁りて十年乃星霜
 を経るやいへども一子なく旦暮おれをうれひて中けるやうに我今年四十
 よ何まるといへども一子おし誰を頼みて此家をゆづらんと憂愁ふせまり
 たる妻もつねぐ此事をなげたおもひたるが何る時たちまち思ひたち水
 とあびて一身と清め人寐鎮まるを伺ひ丑満の頃よいたり家状しれび出
 く關の明神に參詣し終夜が祈りたれを妻事この家母嫁して十年母およ
 ぶといへどもいまだ一子おし願ふくば神明あまみ試されく何とぞ男子
 壹人を授けたまへと一心不亂に立願してさちかへるかくのどくまること
 一七日よおよびあるがこの里の明神と申奉るの神体を天津兒屋根の命
 母一王靈願あらしなりたる御神之(藤原始祖之)天津の町あり權右衛門

が家をぞ仕事おづなり時權右衛門が妻を満願の夜例のどく神前ふひ
 ざまづき幣を奉りたおしけるが心身つかれたるふや拜殿のうへよまは
 らくまどろみ一が壹人の神人頭ら七星のうんむりをいたた身母こん
 竜の御衣と着しるが忽然として来りたまひ告てのぬと善哉く女人
 おん子なれと悲しんで壹人之男子を祈るまかれどもなん心身虚勞よ
 して血氣うましたとへ一たび子を持といへども虚弱ふし成長一がた
 ありれどん其心の切なるを感じて一男子をさづけん其男子十才にいさら
 ばりならぬ道德の僧を師道とく出家なさむべしかならず俗家に育つ
 る事ありまも一家業をゆづらばあまねく衆人の害をささんかまへてうた
 がふことありれとい、おわりて徐々として神扉にむかひぬへばとびらお
 のづるら左右母ひらけて神坐のうちにいそふ權右衛門が妻の覺へず感
 涙を流しさてもくありがたき事かなと頭伏地ふつけけるがあまりふつ



よく伏しけるゆへ額を志た、か母うち心づきおき上りけるが是則南
 柯の一夢之其時目状見ひらき四方を見るは神の燈火をさへて冷氣陰々
 として身は濡ければあし状をぬぐて我家をさしてかへりける夫よ幾ほ
 どもなくして懐胎し月日を重絡て目出度男子平産しこれを見るに生れな
 がら髪長く齒を貳枚生たり近隣の者共是を見て世上は鬼子といふにこ
 き成べしらの儘山野にも捨べきありといひ、ければ權右衛門聞て我四十才
 は餘り始て子を授るるふいかんど捨るの理あらんや成長の後に異變あら
 む人手よかけまじむかし唐土周の世の老子其母の胎内ふ居る事八十年頭
 の毛皆白髪となりて生さぬふとなりかゝるさめしもあれをままして髪なるが
 く齒のはへたらんとい有まじき事よもあらむといふて猶々掌中の珠玉の
 如く愛しなれば衆人も尤と同じける則名を左吉とつけて其生れつき幼
 少の頃より聰明にして一試聞て万を知る母の寵愛限りあしだんくと成

長して五才ふして牛を喰ふの氣あり他の童子母まぐき神秋水の清瀨ある
 がごとく骨を皓玉の美秀成母似て意氣揚々として貫虹の光景あり其上姿
 のまこぶる美麗にして他の童をむらがり遊ぶを見るにあたるも野鶴の群
 鷄にあたるが如く常々のたゞむれふも水邊に出来む土をほりて水をさへ
 へ堀川と名づけ城の形をままび竹木を伐く小兒をあつめ太力長力のど
 く持らゑおのれの大將とあり軍のまねをおしゐるひの樹木ふよちのぼり
 或の水を練習し朝夕これをたのしみ六七才もありければ其智ますく
 他まをぐまければ母親心におもふに此兒斯のどくふ才智まぐまたるも我
 ひをかゝ神明に祈してもふけたるゆへなるべしまうればはやく神明の告
 のどく出家とあさしむべしとある時夫權右衛門に向ひ中々るに左吉事効
 少よく大人もおよびざる程のえつめいゝ然ると俗家も育てんよりの旦那
 寺へたのみて出家とるさば後世は名をあらがるほどの名僧智識ともあるべ

一 諺母も一子出家すれむ九族天は生むとかや中之俗家も成長してもし善
 道におもむるすして慈慈邪智の者とならばくわるともうひあるまじとや
 けむは權右衛門聞て中々るになんが言葉も一理なきよもあらねどもま
 れも斯のどく晩年まおよびよふやく一子を得たれば此家業をゆづりてあ
 がく老をたのしまんと思ふあり然ると壹人の子を出家となして家を出さ
 ば此家の死後他人の物とあらん汝は志いて此事ないふ事なれど答へけ
 まば妻もまゝ壹人の子を捨るふ忍びをかかねてをいわざりける扱光陰水
 の流るゝとく月日に關をりなれば年さり歳来りて左吉も十才とありぬ
 權右衛門思ひたるる左吉生得聰明ありといへ共いまだ書籍手跡おしへさ
 きば和漢の事よくらく成人のうへ人の笑ひを得んまうまじも此所の師と
 たのむべ死人なしとまむらく沈吟して居たりけるがきつと思ひついて左
 吉を呼で中けるる汝他の子供おまさり利口ありといへどもいまだ半点の

文字をよまを文字の不朽の器なり學ばせんば有べうらむいま石山寺の上人の道德智識の聞へあり汝れこの上人を以て師として文學手跡を勵むべしと云けまば左吉かゝこまりぬと答へければ早速同道して石山寺へ急ぎけるがたや石山寺の前よりいたりぬ此山の山は異して一片の土塊もなく満山をべてまながん石なり門々よふ大書金字の扁額をるけ琵琶の湖水と眼下に見下し絶景言語のべがたし權右衛門の左吉を同道し指をもつてかなたこなたの名所をおしへ又心のうちよ紫式部がむかしも思ひ西湖の十景もなこのこれふ及ばんと感づるあゆまゆるが程おく石山の寺門よいたりて右のよを述べきむ取次出向ひてまづ客殿へ案内し和尚よ斯と告ければ上人もとより權右衛門と馴染おればそらく居間へ迎へ茶たばこ不んで禮儀おまりければ權右衛門しかくこのよしをもの語りて頼みければ和尚もええだきどくのとよ思ひ恐僧にあづけられよ此方母も左

様のおもむき有てたのみをうけたる童子おびたしくありとておほひよよろこびければすぐ左吉を寺内ふとめ其身の宿所へかへりたる左吉十才よてえしえて文學の道ふ入たる其頃手跡文學のく免石山寺よ居る童子數人あり左吉十才母てえじめて筆をくだしける母其手せき自然と他ふまぐれまゝ書籍をおしゆるに一を聞て万を知る和尚も甚だ寵愛して手跡文學星霜つもりて十一才の春の詩經と講むるよ聞人おのく大ひふ耳をおどろかす又衆僧打よつて經を讀誦しあるひえ法問などをなせむ側よ在て閑居跡ふくこまをかたるよ一言一句も誤る事ありしりと各々舌を巻て實ふ古今聞ざる秀才なりと感じ皆左吉と叫ぶ才吉くと呼びければいつしか才吉と改名しぬア、おしむべし此小兒斯の如くの才力を善道母用ゆるならは佛門よいらば智識道德のほまれを世に残し武官よ入らぬ英名を子孫につたへ忠義を記録ふかやかさんふ暴惡無道をあゝ惡名を

末代に乃こそ事實と斷腸をべし

○卷之貳

神意は違つて權右衛門禍を求る事

石山の興ふ吉異人に逢事

子を愛して教へざるは父母のあやまりありとむべあるかまた古歌も
ひとの親の心やみにあらねども子を思ふ道は迷ひぬるかよとある如く
山城屋權右衛門の左吉を石山寺の上人よたのきて我家に歸り大きよよろ
こび妻へもしかくのよしを中聞せたまは妻も悦びかこくも斗らひな
ふ者かあとそれより夫婦をさあわれに際あれば石山寺へたづね行て才吉母
逢まゝ學文日々ふまゝみ才智すぐれたるを以て才吉と呼あまよしを聞て
生れるがらの才發母積學れ功をそへたればさも有べしまとよえしり馬に
むちと加へたるが如く出家遁世れものとあるとの扱置のちくの明君賢

主を撰んで青雲の路上にいたらしめば我等夫婦も老樂の幸む此上有まじ
と密母悦びけるが或夜權右衛門妻夢に壹人の金剛力士来りて中けるは神
明あんじを召事急んをみやかよ来るべいと中ければ權右衛門の妻大丸ふ
驚き問ふて曰く神人の何處に居ぬふや力士のいあゝ我よまたが川て来る
べし自づから分明あらんとて手をとりにて馳けるが忽ち一座の宮殿を見る
よ奇花ほころびて金繡たやよまき柳のいと風よひるがへつて金糸の地
をえらふよ似たり異香馥郁としく一座の石橋をまぎて清宮の下に至る其
とき力士おどろかを事一齊して此婦人をめしつれたりと呼よりなまむ中
より壹人の童子徐々として進み来りすあはち婦人を引て宮中へいせし中
けるは汝暫く此所に待べしと興の方へすゝんで馳行ける權右衛門が妻は
神人われを召ぬふは如何成事を命じぬふやと心大きよおそれて四方を見
るふすべて人界と異よして祥雲宮中ふたふ引瑞氣宮殿をつゝむ煙りをふ

くむ青柳のすそをおべる梅花枝をまどへ葉をかさね萬林は百鳥さへむり
 其光景禁裡仙洞もゆくやと思ひやられたり當下壹人の神童をせ来りて只
 今神人來りぬふがといふ聲いまたやまざりしは異香四方は薫いて花ふり
 音樂聞へ一人の神人寛々として來りぬふ左右は七八人の童子ありて何や
 ろんさ、やくを聞は皆鶯の聲燕子の語にて人界の音聲ふあざりければ
 覺へを頭を地は付く拜伏して有ける母神人玉音を聞さ乃たまひたるは汝
 トを今此所によぶ事別事にあらず我はこれ關明神あり先は汝子おた事を
 おげさけるやへに壹人の男子を授けぬ然るは汝愛はおられぬ我教へを聞
 ば才吉十一才よいとるといへども出家のきたあし今才吉石山寺にあるお
 そ幸ひあり早く剃髪なさしを一生をあやまらしむる事あるれとくまた神
 童は命じて外面へ送り出しめたもふ權右衛門が妻は恐き入て一言の答へ
 もなさを身をちめてて宮中を出少しくふり歸りてうの神人を見る母先年

拜し奉るし所の神人へければ心の内ふ甚だ恐れ措をかりけるは誤りて措
 下ふたたとおちたれを胸上に冷汗と流し忽ぜんとして夢さめける其時長
 夜いたくふけ隣鶏の五更を告る頃ありしうば夜のおくるを待て夫權右
 衛門は此事をくましく物語り免も角も斗まんとまた眼を合せて寐りける
 時は夜のほのくぐと明わたり鳥雀をやと出て日色東方にあらまきなる
 頃漸々起出て權右衛門母向ひ夢中の告をものがたり一刻もたやく僧とな
 して我等がふきのちの菩提をとむらせしめんと云權右衛門笑つて曰く
 夫れ夢の五臓の煩らひ心の勞れありと汝は常に才吉を以て出家をさしめ
 ん事をおもふがやへは斯の如くの夢を見たるは聖語も浮屠の異端虚無
 じやくめつとく甚だ是を禁しめぬふまかのみあらず多くの兒と持たらば
 壹人の出家させる事も有べき共晚年はおよびてたまへ壹人の奇童を
 もふけ何ぞ暴涼の衣をまとひしむるは忍びんやと中々隨かひざりしかば

今の詮方せんかたかく密ひそかに心中しんちゆうと苦くるしめたる叔石山寺しやくせきざんじふて才吉さいきち積雪せきせつ登窓とうそうのこうつ
 もるふ隨したがひ才智さいち比類ひるいなくさこへければ自己みづからも心中しんちゆうは慢心まんしんを生せうじ衆僧しゆうそうの愚ぐ
 智ちある者をあらつて折はふし恥はぢしめけるが衆僧しゆうそう等心中しんちゆうはいさきとふるとい
 へどももとより才吉さいきちにおよばざれを口くち状じやうとちて居ゐたりける所ところまる中うちえや
 物もののわり星ほしうつりて十三才じゅうさんさいとありけるが或日あるひ才吉さいきち書房しよぼうを出いでて只壹人ただひとり万山まんざん
 の風景ふうけいを賞せうし何なにまねく山中さんちゆう試遊しやう行ぎやうし只ひとり後山こうざんをのろんで進まり行いくふ覺おぼ
 へむ金鳥きんかう西峯さいほうは飛玉とびたま免東海めんとうかい舟ふねつく才吉さいきち大おほきふを驚おどさもとの道みちを尋たづねて馳歸はせかへ
 るよいが、あしたん道みちふふまよいて忙然ぼうぜんたりまかじ服下がんかは當あたりて燈ともし
 火ひのうげかまかまみへたればこれふ少せうしく心をやまんと足あしふまうせて至いた
 りける舟ふね一軒いっけんの艸庵そうあんあり柴しばの戸とほろぐととお、ひ破壁はへきとも、火ひの光ひかりりと
 もらす直ただふまゝ、みて庵いあんの前まへはいたりおもひけるが我われ此山このやまは采またりて四年よんねんは
 及およぶといへどもいまだ此この庵いあんある事を知らむいるなる人の居いぬふやらん

とひそりお伺うかがひ見るに壹人ひとりの老翁らうおう白髮はくはつ乱みだし居士こじ衣いを着おき机上きじやうは書籍しよじやくを
 ひらたく悠然ゆうぜんとして坐まじ居ゐたり才吉さいきち自みづから戸とをおしひらき内うちはす、み入い
 懸かろよ問とふて中ちゆうけるが我われ石山寺せきざんじに采またり文學ぶんがくをまなぶ童子どうしなるがあやまつ
 て道みちはまよひ此所こゝはきたれり歸かへる道みちを教おしえぬへといふふ老翁頭らうおうがしらををぐら
 し才吉さいきちをよく見みて座ざ上じやうはまねさ入いれ曰いはく汝なんぢ石山寺せきざんじ舟ふねありて書籍しよじやくをまか
 ぶとならば我われとふ事ことあり汝なんぢ學まなんで何なにの用もちか備そなへんとまゐるや才吉さいきち答こた
 へて中ちゆうけるが我われ書籍しよじやく試學しやうんで和漢わかんの事を明あらめ刀劍とうけんを學まなんで武藝ぶげいの奧秘おくひ
 を極きよくめ強つよきを制せいし弱よわきを助たすけてあまねく天下てんかは名なをあさん事をやつて人
 の下母したも立事たつことを願ねがはむ老人らうじんの曰いはく今天下けんてんか戦争せんそうやうく安やすて世少よせうしく治さる
 いうんぞ計略けいりやくとめぐら、刀劍とうけんをもちいて人ひとの上うへは立事たつことを得えんや汝なんぢまづ我
 閑ひままる書籍しよじやくをみまると才吉さいきちか前まへは出いでしければ才吉さいきち披ひらいて是こゝを見るよみあ、
 龍崎りうせきの形かたちのとく鳥跡てうせきふ似にてあるひに丸まるくまた、方かたに、て讀事よみごとあた、ざれ

ば老翁笑て曰く黄口の小兒いりん此書を解する事を得ん然れども其意
 の廣大なるを憐み壹卷の秘書を授らんつとめてこれを讀得るときに衆人
 に勝れたる妙術を得んとて是を與へたれば才吉おし戴き披き見るに龍象
 鳳篆の文字ふいあらねども容易ふに讀得べくも見へむ老人おしへて曰く
 汝たへむこゝろふおさめて晝夜けこまるおらば後來に讀得べしと一條の
 杖をとりて門口より出て才吉に告て曰く汝此杖杖曳て旧路をたづぬべしと
 言終りて草庵よりぬ才吉老翁おしへの如くかの杖を引て旧道を尋る
 道路畫のどく草木の黑白蟻の群集まで分明にして忽ち寺門よりいたる才
 吉不思議の事よかもひ眼を定めてかの杖を見るに大さある蛇なりけむは
 ほどろさ地上に投すてなるが須臾にして一條の黒雲天上より降りぬる蛇
 たちまち其丈貳三丈の蒼龍と成雲中より飛入圓光をひろめかしてくまをい
 の舌と巻て琵琶の湖中に飛入しよたら浪天ふあがり大雨盆む傾るがごと

く霹靂万山よりひびきけむ才吉奇異のおもひをおし早々寺門より入ぬその
 時衆僧等才吉が歸り来るを見て問ふて曰く汝何所より至りて夜をあかしく
 歸り来るや又大雨大雷をも恐まざるに騰の太き小人あるとみおく蟻丸
 あへり斯て才吉の夜の明るを待ていそぎ後山より入て前夜の草庵を尋るに
 かつて知まぬを四方八面をあまねく草をわけて尋ね求よひとつの石塔
 何と半ば土ふうをえれて五王の二重を顯わし才吉おもひけるに前夜の
 いなりへのあらむ此古墳ならん誰人の塚なるか年号月日も知れざるに詮
 方なくの古墳に向ひ再拜してまばらと念じて立ちたるが忽ち胸中と思ひ
 けるに我弱若の小兒といへども衆人を伏するの才力を懐てうのくど
 して生涯の下より屈せんやたとへ天下を掌握するほどの事もなくとも一
 たび此世界に生れたれむ榮花を極る事能はんば實に死人の如く今天下少
 しく治るの時なれば一方より獨立したりとて中々幕下の兵士を得ざれむ事

をふし難し然し人状あづくるの器の金銀はまぐりのなすその金銀を得んと
 おもひ山を堀川を不毛ともなごの一錢と出ま事を得んや我たとへ文學は
 長けたりとも我朝今進士及び級第のさたなき書學のこれ一ツの才藝ふし
 て衆人びうへ母立天下母名をどゞろかし隊伍状指揮し我意とふるふ道に
 あらまをまかを我今より盜賊と成て金銀をもつて人をなづけ衆人の上は立
 て歡樂をまごむるは是英雄の好む所をまごてふ宗朝一百八人の豪傑乃とも
 がらも天母うとりて道をおこのふの理母叶へり盜賊の譬へ卑しくとも
 のうたきをくだきとるは皆是軍法の秘事なり才能のまぐれたるものこと
 孔孟の聖教もいつたんは見やぶりつよいいつ生とあやまつこそ是非もあ
 し

卷之參

才吉山ふ入て劍術を練事

才吉奸智衆人を驚りま事

石川や濱のまさごのつくるとも世は盜人のたねのつきまど寔は然り和漢
 とも母此理なり才吉の古塚の邊りにあつて獨長嘯して主意をけつ
 て寺中へ歸りつらく思ひけるは我今此所はありて心を房中へひうめ徒
 ら母月日と過さんより我家へるへり心と不しひまゝにして刀劍の術をま
 なばんと飛せうに父權右衛門をよびてやけるは某此寺中へ来りて最早四
 年及び文學もよふやく其意味を悟り是より又劍術の一手もおぼへたく
 侍る之願の大人我を宿へ連歸り給へかゝと中けるよぞ權右衛門を
 つともと同一上人は逢てしるぐのむねを告篤く拝謝して才吉をつれ歸
 りける夫より才吉の晝の山林の茂りたる所へ行て樹木をきりて鎗長刀を
 製し竹杖きりて弓を作り大ぼく大石杖相手とあゝ劍術を修練し切瑳琢磨
 の功つもりて身軀飄然としてかろくなり高さよりひくきに飛ひくきより

高きよ飛んで自由を得たりあるひに谷をこへ岩石をつたひ水はいたりま
 終日水練をなし野に出で遠たをのしるにひとへ舟駿足の籠駒は似たり夜
 の房中ふひをまりて彼老人より授りし秘書をひらき見て心中をころし心
 をせめて是をまなぶ終つ解するを得たり此書元米忍の術の奥秘にして
 世の知る所はあらむ才吉是と得て悦ぶ事限りなく是天我を扶助て望を叶
 へしめぬふものなりと獨精を入てまなびける斯する中ふ才吉又十四歳乃
 春を迎へぬ里人も才吉が万事ふ秀でたるを感づける才吉も今の上見ぬ驚
 の思ひをあらしけるあるひは里人うち寄賭博勝負をなしく有けるが才吉傍
 らにありて見居たりけるが頻り面白くおぼへて我も勝負を決せんと思
 へども十五歳またらぬ少年ゆへ兩親みだりに金銀などあたへざればい
 ふもして金子を得来りて勝負をあらそひんとえかりけるがきつと心ふ思
 ひ付てかの石山寺へまふて、終日遊び暮し潜かふ隙をうらひ、ひ寶藏の鍵

盗みとらんといろく心はくだきけるが心は任せざりし一壺人の納所
 中けるに只今寶藏へ用事あり行あり其壁に掛たる鍵をとりて我ととも
 一寶藏へ来り賜れといふ才吉天のたまものことよろこびとらんとする時
 かの納所中けるに我只今廁へ行来るべし霎時待ぬへといひ、すて、出け
 まば才吉手早く鼻紙といだしうば母有りし藥灌とさげのの鍵をもつて藥
 くわんの墨とかき其まは紙の上へあて手ともつて撫けれを鍵の形ち
 紙の上ふ寫りぬ又手拭をもつてかの鍵をぬぐいさあらぬ体母て待ければ
 程なくかの納所来り才吉を同道しく寶藏へ至りひとつの皮籠を出し才吉
 と共よいこぶよ才吉は仕まましたりと心中は大に喜び衆僧は暇を告足ば
 や一我家に歸り納戸へ行て壺本の火ばしを持来り潜に房中ふ至りて彼
 お紙をいだし火を曲て其形のと持らへ其日乃暮るを待て石山寺へ
 いたり驟て案内の知たりたりなんなく塀を越て寶藏へ忍び入金子百兩を奪

ひ取て首母々々馳出しけるが月色雲母入て光りなく四方暗々として更
 知る者おし夫より才吉土地のあふれものを集めべくちをなしけるふ壹人
 として才吉は勝者なり才吉若年なりといへども多くの博奕うちをあつ
 皆手の下へたがへまた酒を吞事長鯨の百川をまふがとく奸智日々
 うしこく公事争論の腰をして多くの禮物状貪はりける権右衛門も此頃才
 吉が身持いまだ年にも行むして放埒比類なく年を重ねるにしがいい
 なる事をう仕出さんとひろくふくるしとける権右衛門が妻の才吉と出家
 させざると川ねく怒けるよ此ごろまた身持以ての外ありければ終身愁
 ひ歎きのあまり一ツの病をひた出し幾程なく身まがりぬ然まども権右
 衛門のさどらむ未だ幼年の才吉おれば身持あつとむるもあらんかど一日
 くと延し異見してさし置ぬ他人も心ある者の才吉が奸智を忌きらふて
 寄付を又無智無學の卑俗の者にかへつて此才吉をたつとびける本より幼

少から萬事不賢く文學武術を嗜み早業母妙を得たりそのうへ博奕ふ妙
 を極めみづうら衰彦道は比を是に因て近隣遠境の好士どもは才吉を親方
 とおす何地の集會ふも多分の金銀をつかひたるゆへ金銀を貪る事夥多
 く其頃大津の町は伏見屋半次として聖の豪家あり漆の木數百本もちける
 旅籠をもつてすぎのひとをまもど此半次といふは四年以前何國よりの此
 地より来りけるよやつい母伏見屋半右衛門が智となりぬ養父半右衛門を篤
 實の聞へある者へふ終は病死して今の半治ゆづり受ぬ生れ付奸佞邪智
 の者にして人を悔りたづかじめども衆人おれが暴惡を恐きて一言も
 あらうあむ然るよある時才吉が父権右衛門と少く争論して権右衛門を罵
 罵恥らしめければ才吉大さ母憤ふり所の鎮守關の明神の祭りよあたり
 て女巫は遣ひ物して神託と号しあらぬ事どもいあしめけるは此國中の漆
 の木の根五尺を堀べし天下は稀ある賢七ツは得べしといあせければ半

次どんよく深き者へければいざ／＼掘て見んといふを手代ども番頭ども
 押止めて中々るのいう神託なればやて無益に數十本の漆の木を枯さん
 やと諫ければ半次も尤と同じ相止たり時ふ才吉は衆人共集けるに今日の
 神託 各ふも聞ひつらん打込て置べたよあらを我後園に漆の木七八本
 有て七色の寶を得ん事は思ひもよらねど七八本の中一ツの寶を得んも
 はかりがたし皆々力を添て掘ぬんや万一寶を得ばかの／＼方へ金子を
 與へんとい、ければ二三人のおぶれもの喜びて後園にいたりて一度
 手をおろしまづ壹本を掘うがつようつて一物もあまた二本の掘て三
 四尺むかりよしくひとつの大石を出せり衆人さてこそと穴の中より引出
 を母四方一尺五寸ほどの石櫃あり上ふ文字あり衆人よむ事能む才吉立
 よりて見るふ寶珠神鏡一面是子孫繁榮の器と大策をもつと彫付たり
 各々ひらき見んと才吉押止めて曰く是全く神器のみだりよ開きがたし

と衆人と乞ふて庭のわきに稻荷の社ありけるが此中安置し酒肴を出し
 衆人をもてあし別は金子を少し出してつうれを謝しければ衆人又のこり
 の木を掘んと云才吉と々めまいわく神託は此國中ふ七寶を出すと乃事
 まばいうんが尺寸の地よまた得る事と得んやとと々めければ衆人才吉が
 貪らざるの高論は伏しけるよつてあのおふま者ども所々風聞するゆ
 へに山城屋の後園に神託のどく漆の木の根より希代の神寶を出せりと評
 判なれば伏見や半治此事を聞いて今に家内の諫をも聞かず多くの入夫をや
 とふて漆の木壹本も残らぬ堀を共寶の事なきて置一片の瓦礫も出さ
 ば各々興をさまじける其上漆の木壹本ものこらぬ枯よける或時例の如く
 賭博の連を集め勝負おとりて後酒のゑんともよふしけるが才吉曰けるに
 我若年たりといへどもおの／＼の厚情をうむるうへにまとも兄弟のど
 し先頃神鏡寶珠を得たるにみちる是いつどりの謀斗かかの半次おのれが富

次どんよく深き者之ければいざ／＼掘て見んといふを手代ども番頭ども
 押止めて中々るのいづれ神託なればやて無益に數十本の漆の木を枯さん
 やと諫ければ半次も尤と同じ相止たり時ふ才吉の衆人共集けるの今日の
 神託各ふも聞ひつらん打はて置べたよあらを我後園の漆の木七八本
 有て七色の寶を得ん事は思ひもよらねど七八本の中の一ツの寶を得んも
 はかりがたし皆々力を添て掘ぬらんや万一寶を得ばかの／＼方へ金子を
 與へんといへければ二三人のあぶれもの喜こびて後園のいたりて一度母
 手をわろしまづ壹本を掘うがつようつて一物もあしまた二本め掘て三
 四尺むかりよしくひとつの大石を出せり衆人さてこそと穴の中より引出
 を母四方一尺五寸ほどの石櫃あり上ふ文字あり衆人よむ事能む才吉立
 よりて見るふ寶珠神鏡一面是子孫繁榮の器と大篆をもつと彫付たり
 各々ひらき見んとま才吉押止めて曰く是全く神器のみだりよ聞きがたし

と衆人と乞ふて庭のあまゝは稻荷の社ありけるが此中安置し酒肴を出し
 衆人をもてあし別々金子を少し出してつうれを謝しければ衆人又のこり
 の木を掘んと云才吉とやめまいあく神託は此國中ふ七寶を出すと乃事を
 きばいづらんが尺寸の地よまた得る事と得んやととやめければ衆人才吉が
 貪らざるの高論は伏しけるよつてあのおふまき者ども所々風聞したるゆ
 へに山城屋の後園は神託のどく漆の木の根より希代の神寶を出せりと評
 判しなれば伏見や半治此事を聞て今に家内の諫をも聞ず多くの入夫をや
 とふて漆の木壹本と残らむ掘々共寶の事よきて置一片の瓦礫も出さま
 け各々興をさましける其上漆の木壹本ものこらむ枯よける或時例の如く
 賭博の連を集め勝負おこりて後酒のゑんともよふしけるが才吉曰けるは
 我若年たりといへどもかの／＼の厚情をうむむるうへにまとは兄弟のど
 し先頃神鏡寶珠を得たるのみを是いつりりの謀斗かかの半次おのれが審

貴をたふよかけ我父をえづらしめたれば我をこしく斗りくかれ母不覺の損をふさしめたること語ければ衆人手ともつゝひたひよあてゝきてくまさまいさ斗略りあど是より皆々才吉が下よたゝんと歸伏しぬその時才吉中けたるの俗説母より甲よ似て穴をわるともつともなるるを夫人たる者の其心ざす所のえたさむといふ事あり一たん人と生れてこの世よ出てなんど愚々として人の下よ屈せんやとへ盜賊となるとも堅きをくどた斗略を用ゆる事の軍法の興義ふあらむして何ろや今天下少しかさまるといへども諸國安平あらむ盜賊蜂のごとくむらがり或は金銀をもつて人をあづけ黨をむきんで深山よかくれ時をうかがいて一方ふあふらばあま英雄のほまれよあらすやと言葉とたくまは迷々れば黑白をまきまへぬあふき者どもなんぞ深きれもんむりあらんや翻とそろへてひそりよ同一願くば教訓りたんとぞ中けるよつゝ其日始めとして皆々血判し黨を

結び種々の手だまをな一所々神社佛閣近村近郷ふ押入にだれ入黒衣をもつて面を覆おし入けるこの事いまだ他人の知らざりけれども権右衛門は才吉が放埒つものりけむ今に詮方なく後難を恐れ終ふ愛を捨て十五歳の夏勘當しけりまると骨内わかちたる親異見折檻し詞と盡すといへども中々聞入む父子一世のおもた因縁をまつるころうたてかりける次第あり

卷之四

色に迷ひ半次命を落す事

死骸をたづさへ才吉大金を貪る事

諺曰く子を見る事父ふしかむといまると千古の金言かり爰よ山城屋權右衛門の晩年ふおよび子なき事と悲しむ其妻神ふ祈りて一男子と得るといへども姦惡無道の者おれば天道を恐れて終に勘當しけりまると才吉いさゝらもくゆる色おく我智杖以て一天四海ふ名杖ふるるといふ斯のどく

衆も秀でたる才能おれを博奕打の中よりありて取用ひられ多くのあふれ
 者どもふくろを荷ひ器をたづさへきたりへつらひける才吉は自手をくだ
 さず只軒斗をおしく衆人を指揮し大津の町をおきて一ツの閑地をあら
 ひ何の活斗もあさむ密に賊の頭となり博奕のやどをおしけるこゝふ同
 町の中より大和屋藤内が方へ武藏の國より壹人の妓女来り名を初おとく
 その容色まことふる艶麗おて沈魚落雁のすがた閉月羞花のよそをい寶母都
 母もおとるまじと衆人こぞつゝ其色香も迷一度逢とき心とどろろかじ
 胸中さざざてあたかもさけし沈酔するの如し才吉ある時彼大和屋が門口
 をとふりけるがおりふし初花旅客を送りて外面へいでたるを才吉眼をさ
 だめて妓女を見るうんざしあゝめよさし鳥雲の鬢づら秋の蟬のつばさを
 かさねるごとく遠山のまゆ桃花の口びるたをやかまふり袖春そうの手を
 あらわし風もすそをひるがへし雪の金蓮をまゝむ才吉おへむ足をと、

めまむらく立止まり茫然として春路にまよい初花も才吉が容兒の風流な
 るを見てひとろ母心を動かしけるが戀々として跡ふりかへりて入しける
 才吉も心中蕩々として夢路をたどる心地してそれより我家へ歸りけるが
 いつしかえつ花ふなれりめて深き中とあり雨のゆうべや雪のあしたの厭
 あくろよひたるがある夜初花才吉に向つて中けるの妾は元速き武さしの
 國の生れよして父は齋藤柳齋といふく劍術を好む門弟夥多しく有て衆人
 のためは用ひられたるが有る時竹内内記といへる浪人日本武者修行の回
 國者と武邊とくらべえべる之君も劍術の師範をおしぬふよしうけぬ
 り参りたり一度御立合下さるべしといふふど父も止事を得むほさきを争
 ひたるがついに打勝ぬ其夜何者共知きを忍び入て父を殺害し及び行方ま
 れを落失たり妾其時えづかよ十二才おありけるが母の養育をうけて弟助
 市なるものともふ日月を過しけるがいかなる不運にや母うへ病氣づき

みふと兩三月を經てついで身まかりぬる事よりさる方は養育けるが貧家
 よして朝の煙り夕よさへてうき事多た中は成長しく今年十八才よおよび
 なるかついににかゝる娼婦と身とあづめぬ第助市十一才なりける試さる方
 へ預け置我身の此所へ来りうた川竹のあがれは沈みたまむ今の何國いか
 ある所にいさながらへぬるや生死もえかり難しさあさだ頼まくるさ
 うきふし侍れば何とを妻を根引して永く借老を契らんといとも哀れよ
 聞へたれむ才吉もさすがに哀さをもよふして答へたるが我も其事はとく
 より心づきたれとえこの頃年のあは人の風聲をさくふ伏見屋半治が君を
 しとふてかよひつめ今の身受の沙汰に及ぶよしさあきば彼は豪家の聞へ
 有り我のまた親のかんどうをうけて見るかげもあきものなきは君のおも
 ごとくもさかむればかり思ひつめたればとて證なすと扣へしなりと初花
 兩眼ふ涙を滂めて中けるに左おもひぬふもことわりなり此頃半治どの我

もとよ来りて種々の言葉をもつていどむといへどもとらぬが志たうとさ
 るをいさどふりてついで身受して手元の花と詠めんとを妻もあまりのか
 かしさをれとなく君ふ身受をあいなべるに浮川竹のながれふしづむ身あ
 れども情有人もあらば身の上の事をうたり仇を報わんとおんひしよえか
 らむも君の厚情を蒙る願わくはあわれとたれて仇人を討てたびぬへか
 の父をうつて立のさたるにひつじやう竹内内記ならんとおとどおむせん
 て語りたる才吉のうちうあづたいかよも能ふえうらまづ身うけして
 後免も角ふもえかろうべしと其夜の志めやうまうちかたり曉つき告る
 鶏鐘は巫山のゆめをやぶられて又逢さんと約束して心と残して立かへる
 斯て伏見屋半次の何と初花を我宿の花となして樂まんと日夜心をくだた
 たるがある夜初花がもとよ来りいろくとのさくどきか、れば初花もえ
 ちあつかひて中けるにさみ斯のどく妻を思ひぬふうへの免も角えいたを

べしまづこよひに歸りぬひて明日のあらむさだりぬへと申ければ半治も
 詮方なく歸りたる初花のさつろく才吉を呼むりてあかぐの由を物語
 りて一刻も早く召連ぬへと申ければ才吉を暫く沈吟して居たりけるか忍
 ち菱斗を生じ初花が耳より口つけてさ、やたたるの今晚半次必来るべしそ
 のとき斯乃どくまべし必事を誤つ事あるれと云合めて歸りたる其夜半
 治あんの如く来りなれば初花をそふやたるを妾君の心は随とんとおも
 へども才吉を身受の日げんを期したまはせん方なくあかぐ一段此所を
 のがれいか成所ふり身をかくして後日事を斗るべし君今宵丑三つの頃金
 貳拾兩とたすさへ来りぬへ妾いう母えしく忍びいて後園より逃ぐべし
 君もひそるは後園のあき外に来りぬへとあざむきなれば半次賢と思ひて
 大きに喜んで歸りたるうく才吉を我宿へ歸り黒き頭巾をかぶり面を隠
 し二尺登寸ある忠綱の脇差をよこたへ身輕舟出立て夜のふくるをまちけ



るが五満の頃伏見屋を望んで来りける母むかふ一童人の男忍びやのふあ
 のと来る才吉月かげふまかし望み見るは是則半次なり才吉物をもいわむ
 つ、とよりて脇をらを一ト何て當けるに半次の思ひもよらぬ事をれば地
 上ふどふとおし倒けるが才吉をかきむつゞけさま母三四とびあてたれば
 思たへたをそれより懐中の紙入をぬすまるとるは金子二十兩取得たり才吉
 大よよろこびいろがゆしく半次が下帯をときて首母まといみづからくび
 れ死したるがどくなして大和屋が軒よりけおさ後園えまわり飛鳥捕陰と
 いへる忍びの術をなし一トおどろしつ塀を乗こへ飛石をつとふて入たる
 が向の障子の何あたふ人有と見えて足おと聞へければ是必初花来るあら
 んと木かげよと、をみて伺ふは果してえつ花をりければ才吉をしづく
 と立よりて中けるは事成就しぬ汝じをみやぬふ内ふ入亭主にまこへて詞
 とひく、しうくのどくさ、やくべーよくく心得てを仕そんむる事を

かまきと再三おしへて後又後園の塀をおどりこへて出さりぬきて初花のひ
 そうにののていしゆの寢室えいたり中しけるを妻只今茶を呑んとてかま
 どのへんへいたりけるが表のうたへ人の来りしよふよおぼへければ深更
 におよんで誰やらんと伺ふ母又音を早く行てうかゞひひへ盗賊ならん
 と言ければ亭主大きよおどろき手母棒をさげて馳出ひそう窓をむらき
 見るは軒下ふ人の才たる体おればうちより聲をうけて何者あるやとふ
 は一言のこたへもあし亭主大たよいぶく思ひまどの内より棒を延し
 て打んとくまき共かつうごうざれを心大きようたがひまこし戸を開き
 月のげあてをのして望み見るお是人の首くびり死しとるゝいかなる人お
 るやと月のげあてよくくまのし見るお伏見屋半治へなればたじめて大
 死は驚さいかざるせんとあんに煩らひけるが所詮このま、捨おかむか、
 り合となり商賈のトやまとならんしるむ人志まむひろのよ水邊は持行打

まゝをかむ瀕死のものとなるべしと斗略杖たわめりの死骸を引下し肩にかたて行とまる所え後ろの方ふ人有りて中けるのをなんぞ大膽にも人の命をとりいづくに携ゆきて後難をまぬかきんとまるや天道の非道をむつゝぬふ事あきらむるに我これを打ておきかたしといふ藤内は肝を潰してかの死骸杖かたをらより置くたきなるぞとふりかへり見せば才吉は藤内中けるのをいれいれいれ人を害をべき家軒下ふくびき死したれば後日あり合と成て数日ひまたらば家業の障りともあらんうと思ひ水邊え携へ行て人知を捨て捨て後うきを消さんと思ふ斗りありいかんぞ我手をあろして人の一命をとらんや汝高聲よさなぶ事おかれといふよ才吉あざむらひていれいれいれ事をたくまじしで我をあざむき得べきとも天をあざむき得べきんや彼みづから軒下母きたりてくびれ死しおむ汝はいらんぞ早を此事を知るの理あらんやあんどたとへはやく此事を奉行所へ

訴へあきらかき決断を受べきふ奸斗をもつて人とあざむいた後難をまぬかれんとすこきおんむがあしとるよ遠ひおし我明日奉行所へ訴へべしと申ければ藤内いかんぞ才吉が奸舌お勝事を得んやついで頭を垂て居たりしが才吉に向つて中けるの君此事をゆへなく斗り給ひ多く禮物と出して謝せんといふ才吉は心中母仕をまじたりと喜び藤内はむかつて申けるのうれを我ひとつの望と有是をゆるし給ふや藤内中々るえ此難義をだまたす給ひよひとつの事のさきおき七八のとおも命ふとがふまよ才吉曰くまつひとつよなんぞが抱へおきたる初花を我おあたへ片付金として三十兩おくるべし藤内大さよ仰天し金子三十兩を送るべしなれども初花の我をぎぎいの根之君あきらむきつゝ給へ才吉中けるの汝人殺し金子を奪ひ取たきば三十四の金子のおしむまじられゆへに我かの女を望むなりなんぞゆるさむんばまれも又しひて望まむとてついで袖を

はらつてさうんとを藤内急よおしと、め然らば是非もあし君の命よした
 がふべしはやく兎も角も夜乃明ぬ中にはありぬへと申なるふ才吉の死
 がいを改めて大きよおどろきたる体をなしひとりどしくやけるのいお
 るものなるやどおもひまよ是の伏見屋半治へけるとつぶやきて藤内とと
 んに彼の死骸をよない湖水の邊りよいたり帯を以ていしを首よく、り付
 湖中へ深めて大和屋へぞかへりける

卷之五

娼婦初花父は仇を報る事

才吉難と恐て勢州よ走る事

古語よいあく天の高きよ居てひくき母きくとのや爰母大和屋藤内の才吉
 とともよ我家へのへり約束のどく初花をば才吉ああたへならびふ片付金
 三十兩を送りなれば才吉大ふよろこびいそぎ吉日をあらんでえつえなを

むかへとてよろこぶとかがざりなしあると死奪取たる半次がうと入の中
 よいろく書付ありけるをひまに任せてあらため見るよ一ツの帳を見出
 しひらき見る母細術の目錄なり才吉猶もよみて見るよ年号月日れ下ふ名
 あり竹内内記所持と有ければ大よ驚き妻をよびて申なるのかの伏見屋半
 次是あんトが父の仇内記なりなるともの語ける母初花もあつよろこびう
 つにかるしみて申けるの妾かたきの顔を知らぬころうたてけれ眼前ふ父
 のあたを置おがう知るとあたあを然れども天命のがき難くついでよ君の爲
 よい乃ち状うしなふも天の罰しぬふ所ならんとよろこびあるぞれより才
 吉のまきく奸智をもつて衆人の金銀を奪ひ盜賊をなしばくちをたのし
 んふ早十八才の光陰を過しなる然る母誰いふとなく半次を殺したるの才
 吉ありと風聞き又大和屋藤内の妻母物怪ついで夜ごと母かろろしき夢を
 見る才吉が妻もあやしむ夢を見あるひに種々さまくの事ども口をり

て亂心らんしんしたりければ才吉さいきちをむかしの愛憎あいじやうもいつしう打捨うちすてくおのれが邪智じやち謀斗ばうしやし奢侈せうてうの増長ぞうちやうよりみゆよき女おんなを兩人りやうにんまで召めしる、へまた別家べつけ母かこひ置おきく是母これおかよ通かよいほまのあれどもなさがとくよして妻つまの病やまいのままをくぐう長ちやうあらしぬ事ことども云いの、しりければ才吉さいきちを災わざわいの身みの上うへとならんを恐れおそれひそかよ妻つまの初花はつはなを人ひとを忘れわすれどく藥やくをえつて殺ころしいまのこ、ろ安やすしと惡業あくがら日ひは月つきはまさりたれば里人さとびとも才吉さいきちが暴惡ぼうあくの仕業しわざを奉行所べいぎやうしよへ訴うたんと内談ないだんおしたり又大和屋またやまご藤内とうないがうちねの頃夜ころよごとく妖怪やうかい出て家内かみの人ひとを驚おどらし藤内妻とうないつまの死靈しりやうのた、りよて家内かみをくるひあるさ大音たいおんおて中ちゆうけるは才吉さいきちを殺ころして大和屋またやまごの軒下のきしたはかけたると後のちの災わざわいを恐おそえて奉行所べいぎやうしよへもつたへすあまつさへ藤内とうないと斗はかつてひそかよあうべね湖中こちゆうは沈しづめたりとさ々ささびけれむ才吉さいきちも今いまの災わざわいひのいたらん事こと旦夕たんせき母有ははありと思おもひ何かさへも適おがて命いのちを全まとふせんものをと尾州びしゆうの方かたを望のぞんでえしりけるが不日ふじつは勢州せいしゆう

ふいたる此所こゝは天照大神てんせうたいじんの鎮座ちんざましくて諸國しよこくより參詣さんけいの貴賤きせん道路だうじやうちまよ母ははむらがりて繁榮はんえいいふえさうへ才吉さいきちはまづ此所こゝに隠かくれひみて諸人しよにんをあざむき盜賊とうぞくをかさば其身そのみをいる、不足たるあらんと大ぜいのあふき者をあつをばくちをえつめ金銀きんぎんを以てひとの心こゝろとむまびとうどくとをけきむ近郷きんかうの盜賊とうぞくども馳はせより師しとしけるあるとた才吉さいきち七八人にんの手下てしたをあたがへ夜よに入いりて城下じやうかより二三里りも深ふかき山家やまがへ行いつて見みれば明朝めうてう城下じやうかの薪屋まきやへ達つたし賣うべき用意よういよさき真木まき伏ふたばよして直ちよくに荷にをひ行いく様よう母ははこしらへ置おきたる状じやうぬまを城下じやうかへ出いける時とき分ぶんの夜明よあけなれば薪屋まきやへ持行もちい直段ちよくやまく賣う拂ひひ多おほくの代しろをむさがりたる此勢州このせいしゆうの土地ち繁華はんかうあれば富貴ふきの人ひともおろづら多おほれ其中そのうちよて此こひと元米げんまい京都きやうと出生しゆつせうの人ひとなまじが青物あおものおどと渡世たせよしていとつてまづしきまぎとひあれども此人このひとあまのある人ひとにしと者母もの賣うをいとひ朝夕あしたおこたりなく家業かぎやう母精せい伏ふ出いし追おいて都合つがうも克成よくちやうお任せ商賣せうばい替かして伊勢屋いせや

傳六と聞へし者の四日市に邊に住居して餅屋の店をひらけ所分限の聞へ有ければ押入て金銀とかまめとろんと思へども用心堅固にして中々容易は走へ入がさく男女合せて二十余人のくらなり此傳六が店へ壹人の僕来りてもちと買けるが此のち度々来りて今の馴染となりぬ此僕あるとき例のどく来り中なるに此たびに柏餅が金壹兩分と、のへたしといふ主人傳六是を聞て中けるに我數年此店餅母てをざわいをなまにいまだ斯のどく柏餅を買入るし所詮今急命じぬふとも今日の出来難いといふの男の曰く今日の入用なればとてきうは出来もいたまま是まつさく今日の日事あらむ五六日も經て入用ありるの日ぬ我又来るべといふて歸りぬ叔又其日のくれ方ぬ又壹人の僕年の頃五十斗りあるが與州邊のすまれと見へて詞をふふりて聞ぐるしきが切餅十五ぬれといふ畏ぬと紙につゝみてまたしけるがかの老僕腰のまわりをたゞさぐりけるが

錢を失ひしと見へて當惑したる体なをけるがあの見世のものふむらひて中けるに我あやまつて錢を遺失たると見へて尋ぬまじもかつて見へを然れどもなんどいまだおらみおらむとが錢をとりて来るまで此おまじをあげ置べしと出しなれば見世の者此脇ざしを見るは柄糸のまき轡のまきて儲たる切先をあらあしまべて破損したまは心中中ひろうは笑ひく中けるに夫もおまじついでに節持来りぬへとい、けれ共かのおとこのまよとしてうつて聞入をついようのまきざしをあづけ置て歸りぬ傳六もこのまよとりてうたをみへさし置ける斯て傳六の三四日を経てかのかしの餅をおびたゞしとこしらへまちければ例の男三四人の下部をしたがへ来りく釣臺美々しくもふけ来り傳六に金子をあたへければ傳六中けるに足下の主人のいうある御人よて斯のどくおびたゞし柏餅をと、のへぬふやかの僕あらつたこたへけるに不審と思ひぬふも實に無理ならむ

われら主人の近年むさし城主の寵を得る桑名の城下より来りぬふよ刀
 細の見つけしぬふ事其妙をさとりぬふよし常は桑名の城中に出入して貴
 人高官の尊敬を得ぬふに城中へのおくりもの酒餅ふよらむ莫大の物入る
 り此上もまた時々買求侍るまゝ心を付てたまわれと申ければ亭主の大き
 よよろこび能旦那を得たりと思ひたり其後かの僕壹人の侍よしとがつて
 傳六が店先を過けるがりの侍何やらんりの男よさゝやさければかの男傳
 六が店へ来りて申やう我只今主人の供をして是まで来りけるがあやまつ
 て一ツの物を忘れたり一ト走りて取来らんとを主人無僕子て中途成
 難し暫く我のへり来るまで主人をさし置ぬるべし傳六聞て申けるにわ
 き等近頃たびく御用仰付らるる事をまじ御目見も仕りたくとぞんじえ
 べりし所なるよ今日如何なる吉日ふて此所へいらしめたるやと大死よ
 よろこびいざこなたへと申さればりの僕さうく主人を引く来りければ

家内こつて奥座敷に誘引して傳六首をさけく禮をおしつらくかの侍
 を見るよ黒羽二重れ小袖を着し琥珀丹後の裏付袴折目高くしていうさま
 天生の容兒なり傳六申けるに此間中よりふと御用仰せ付られありがたき
 仕合なり此上相替らず御用相勤やとすと述べ侍の答へて申けるにう
 の者我家よ来りていまだ久しうらむといへども万事よ心きゝて調法の者
 なりうれ貴家の餅菓子甚だ能よしを申ゆへ心見るよ其製格別ありゆ
 へよ我も又他の家かもとめを家来のを申しふく委く聞つらん我のものと武
 藏の生れししが幼少より刀劍を見る事を好みすこぶる其妙を得たるゆへ
 城主よ愛せられよ此所よいたる然れども城主の御用より外にいつとめ申
 さむ近來のよ死刀を貴人高位の方へ出れば中人以下に甚だすくおし却
 て邊土の百姓など先祖より持傳へたりとて能道具あり然れどもその善惡
 伏知らむと語りければ亭主ふとりの切餅のうりりよ取置たる脇差の事を

思ひ出し此間一の事の事有て古た脇差をあづり置たりと申ければ
 の侍のいやく今城主我母命ト一腰の脇ざしを尋ねぬふゆへあきも心を
 付て求るゝ何もなぐさみなまば見せぬへと有々るゝ亭主以前の脇差を持
 いで、侍の前より出しければ侍取あげて暫く見物しく有けるが忽ち聲をあ
 げてまとい希代の名作と打返し見て感じければ亭主を始め家内の
 男女大きよおどろき果たる斗りあり傳六申けるは斯のどき錆とささしの
 何の用よ立て斯のうんじぬふや侍のいやく我此道をこのんであまた眼を
 ふれるといへどもおのどき名作を未見む傳六此物語りを聞いて心中丹た
 ちまち大慙を生じ侍より向て申けるは然らばあたひは何れどの物あるや侍
 申けるはうよふの名作よ至りて申定まるあたひとていなし今城主もつば
 ら名作を棄めぬふ左様の望母まるまれば百二十金といふとも可あるべ
 しと物がたりの中より家来ひひとつの風呂敷包を取来りければうの侍の一

禮して出さりぬ傳六の思ひもよらぬ名刺を得て思ひたるのかのおとこ斬
 のあたへをつくのいて此脇差を持行ときいいうみせんと思案して有ける
 が忽ち先日のおとこ錢を出してかのおきざしを持行んとするを傳六申け
 るは近頃以て失禮の至りながら此脇ざし我にむりぬへと言にかの男申
 けるは見ぬふどく見苦しき脇ざしなれどもこれ先祖が持つたへたきだけ
 つしてたをまゝ傳六曰く只今嚴寒の時節足下ひとへもの袂着し寒氣ふ
 かりさきんよりの此一腰を賣拂一身の寒冷をまぬるきたまへと申ければ
 かの男頭をふりて申けるはいやとよ今我此脇ざしをうりて一身の寒氣を
 凌ぎたりとも一生のあいだ身をあたゝむるふ足を賣し瓜を割の用よもそ
 なへがたき一刀なれども我先祖より持つたへたきばおきまた一子よつと
 へて先祖の遺言を専ら大切とせんといふまゝいで行んとす傳六あはしと押
 止めて申けるは然らば足下いかほどの價を得ば賣ぬふべきやといふよか

の男我一生をすごまふどの事にいたらば費べし左もあくらば決して賣ま
 傳六再三ことばを低ふしてなできとまといへども愚直の男ゆへ一す丹志
 たがわをして中けるの足下うれほどのぞとぬい金子七十兩ふ賣拂ふべ
 し我先祖の相應の百姓にて有けるが父におくれ困窮の身と成ければ多く
 の田畑を失へり今七十兩の金子あらばかの田地を取へさんまうる時の
 先祖へ對して重代のぬきざしを賣たればとくえづうしからむと中ふど傳
 六心の中おおもひたるのさむらいの物語に城主のむろとよまかまる
 時の金子百二三十兩といへりとして心を決してついで金子七十兩を出して
 もとめたる

卷之六

吉江中一鶴をさる事
 和向誤て獄中お陥る事

發よ曰く慾欲貪る物の損じ慾をくふき者の却て利すると扱も餅屋傳六
 の彼腰れ者を買取て大に利する事を思ひ心中に歡ぶ事限りなく翌日早天
 ふ桑名の城下よいたりあまねく彼官人をたづね求るといへども曾て知れ
 されむ大きに心あめて東へ走り西へめぐり黄昏よいたる迄さがし求る
 といへども其名をへ知さざれば空しく我家へ歸り驚々として恰も野狐よ
 魅されたるがどく案内こどつて諫めけるの君かくのどく豪福み晡し給ふ
 がゆへに賊徒姦斗を以て欺きたるあらんと少く刀劍の事状好める人を
 こふてかの脇差を見せしむる再高金の事の扱置野菜をさるべくもあらぬ
 鈍刀へけきば長夜の夢の覺たるどくいかを憤るといへ共詮方なくて打過
 ぬ是皆才吉が方寸より致を奸斗ことぞ扱を才吉の國中の惡者をあつめ五
 人三人ツ、往來の旅客のどく出立て青天白日といへども人の懐中の金銀
 を奪ひ手向ふ者の打倒し傍若無人の舉動をさしける程に官府よもこれを

捕へんとしく國中靜ふらす才吉の小賊らを志すが、晝の深林に隠きある
 ひの山寺の塔の中へ潜みて専ら國中を騷ぐる或時壹人の小盗人進み出
 て中けるに此頃國中を横行して衆人を煩わしむるがやへに城主より取手
 の人数を出してさびしく捕縛んとするよし一旦此所を退きて尾州へ赴ん
 尾張の國の繁榮の地ふりて商家軒をならべ山海の珍味の酒樓に満て陌上
 の行人晝夜をすてすまばらく彼の地へ身をうくさんとやければ才吉尤と
 同心し則小賊等に向つて中けるに汝等の跡を五人三人ツ、打連て来るべ
 し我のさゝ壹人今宵ひそかふえしるべしやて旅人の姿は出立小道をいそ
 ひでたゞらば桑名の城下に至りて暫く憩ふて在けるが程おく東をらみけ
 れば岸の邊り舟至り舟やあると望み見るよ一艘の渡り舟岸の邊り漕米
 る多くの旅客待もふけたる事あれば我先にとせ集り蟻の群るどく乗ら
 づる才吉も身をおどらせて舟中よとびうつりける時船頭どもつなを解ば

船の江心を望んで岸をさる事二三丁まさし是

雲もきな波とぞ見ゆる海士ものか

いつしの海とどひてあるべし

船中の人々四方の風景を打興しつゝ、まよみゆさけるよ忽ち東南の方へ當
 りて一塊の烏雲起りて見る内ふ一天にたびこり大風一度吹起りて白浪
 をひたし舟の高山に登るがどくあるに深谷へ落入し似たり爰に於て乗合
 の衆人さもをけし魂飛んで生たる心地さらまおし水主かん取秘術を盡し
 働らけども船はたゞくると廻りてあまや海底のもくづとあらんとぞ
 見へふける水主梶取髪を切て水中舟投入神佛は祈誓し題目を唱へ念佛を
 誦あるひに觀音を祈り彌陀を念ひ唯助けぬへと叫びけるよ此時才吉は
 座して目を閉てありけるが水面何やらんうめく事一聲船將は獲がへらん
 と志ければ目をひらさく望み見るに其丈貳三丈斗りの鰐鮫眼の百連の鏡

に朱とぞ、ぎたるが如く波濤を排きて舟乃邊り近付来る船頭戸を明て
 呼よりける此舟中一豈人鱈のためお望まる、之かならむ豈人の命とお
 しんで衆人の命を害まべからずえやく各身につきし物を水中へ投しぬへ
 其沈みたる持主水中へ飛入て衆人の命を救ひぬへといふは各々目を見合
 せ我らやいま海底の藻くづとならんか己れや唯今魚腹ふふむらる、か
 と只呆れにあきまてありけるが斯てい果じと皆々一物を取る水中へ投入
 る、よ才吉が紙入のみ水底ふまづミタれば才吉少しも恐れを刀をとりて
 船ばたし願き出我今海底へ入て衆人の命を全ふすやをれ毒魚あんじよ
 我を腹へ我また汝を殺して再び生命は全ふせんとい、おとつてさるまく
 浪し飛入ければかの大鱈鱈の舌拭ひるがへして才吉を呑んとま才吉元
 より水練の妙を得たれば身をひねりて切付るよ目よ鼻をかけて切こん
 だり猶もまうさむつ、けさま切付ければ白浪たちまち紅と變んど万山の

紅葉一度は落るがどと然きどもさばかり乃大魚をまば少しをひるます終
 ふ才吉をのこおわりて千尋の海底へ波濤をひらきく入よける船中の人々
 とよ才吉がえたらきを感ゆる斯て風も静りければ衆人の誠は虎口龍
 尾の難を免れて九死一生にあへりと悦びたる内船の宮の浦に著しけむ
 おのく岸よのぼりておのがさまく四方身身を散じて失ふけり其翌日
 一疋の大鱈死して宮の浦よ着けるがろの脊のすへ一人の乗るさまおれ
 ば浦人ら小船よのり至り見るよ豈人の手よ白刃をさげて座へ居る漁
 人ら急し船をよせて其ゆへとよふよ才吉漁人お向つていふ我昨夜桑名よ
 り乗船したるが風波の難お逢のさならむ此毒魚の爲よ吞れけるが腹中を
 切破り命を全ふする事お得たり然き共昨朝腹にたたるま、なれば殆んど
 ど餓死におよばんとす願わくは一飯を施して一命を助けぬへと申ける漁
 人ら歎息して大に驚さける夫より漁人よ才吉を魚船よのせく連歸り衣食

を與へけきむ才吉巧言を以て衆人を迷し此所にて暫く飢渴状凌ぎけるが
 日を経て頭の髪亂れ落ちてさしえ美麗の好男子も鰐の腹中母あつて毒氣を
 受たるがゆへに面色えられたりて目口ひきつり宛然鰐のどく頭母毛を生
 むる事なく依之人々鰐和尚とよび又鬼和尚と名異名を新て月日おし移り
 てたや才吉世一歳とふなりける鰐和尚才吉はこの尾州に求りても大勢の
 悪者を集め専ら盜賊をなしたるが或る時貳十四人乃黨を結び一軒の富家
 へ押入たるふ家内も無て用意やしたりけん悉く出合て刀を振つて切て懸
 るよ引退くる者もなければ夜盜の人數も皆々抜合せて火花を散して戦ひ
 たるが敵味方ともよくらまざれよて同士討するも多かりけきむ才吉聲を
 うけて白さひの分り家内は者ぞ心得て同士討すおと言ければたがひふ別
 れて切合たる然きども兩方母手負死人の者多く近隣若者ども盜人をどら
 へんと加勢しけきむ夜明をむ事むづかしと鰐和尚板塀を傳ふておげ行處

此家の主人手鎗を以て只壹突と突けるよ高股をぐさどぬれたる時きく
 も何ぶあしとい、又鎗を突直さんとする時たや塀の外は飛下りて危ふ
 き命を助まかりたるのよふて財寶を奪ふ事ハ叔置片腕と頼とし小盜三人
 を失ひ其身も疵を蒙りなれば大さ母憤りいまだ疵もいへざるふ又惡徒廿
 四人を卒一清須山家ふ世々豪富の聞へ有る農家才おし入家内の者どもを
 悉く捕へ申纏をのませ柱に結ひ付財寶をうむひ擔び出さんとをるところ
 へ其家のむすこ他へ夜咄しよ行て戻りうりけるが門の戸の明たるを見
 て内をうかがふよ盜人の入たる躰おれば用意のほらを吹立ると近隣近村
 の者ども漸々よたせ集り賊徒を四方八面母切散したる才吉も刀を振ふて
 あまたの百姓と戦ひけるが誤つて竹藪の切杭ひよ足をつらぬき痛たへが
 たく退き無たる狀小賊壹人走り来り肩よ引るけ走り出んとしけるが大勢
 の百姓むらがりくわりうさなつてつひよ貳人を取こよを殘る賊徒是を見

てミお散々ふた逃失たり斯て夜も明渡きば兩人を高手小手母禁しめ領主へ引て訴へける母兩人ともふ入牢させ日々詮議するといへどもかつて白状せざまばいたづらふ月日を過しけるある日才吉牢番の者ふ頼みたるに我先に捕られたる時打捨置し守り候母小さき疊表具の観音の畫像あり苦しむらむいたまわれし我等積惡の應報にてかく獄中苦しみをうくかならむ此度の死刑のがれがたうるべし今世にて惡行もあしとればせめての後世を願ひ来世を助りたく侍るべしとひたまをら涙を流して乞ければ獄中も観音の畫像位ひの苦しむるまじとして三寸斗りの疊表具の畫像を牢の内へ送りければ才吉の再三涙を流し恩と謝して喜びける

卷之七

獄屋を破つて三州母走る事

鰐和尚大に衆僧を欺く事

人窮むる時にかあらず計を生むとかや鰐和尚あやまつく獄中よつあがれいふもして逃れ出んと心をくだたけるか兼て用意やしたりけん観音の畫像を得てひそく糊をえなま三寸斗りの鋸りを出し又元のどくのりをつけて獄中の柱ふるけ置獄吏の采らざる間隙を伺ひ鋸りて根太を切ぬさなるが功積りて終に一枚の板切えおしける又才吉獄に在るの日より病氣ありとて多く食事せざりしがいつの間にか持へけん干飯を四合斗り禪のあいだよつ、みいれ扱日頃荒業とあしたる者今獄中母在て終日居まきて憂愁よせまりて肩腰いたみて誠たへがとしと小賊を相手とあし居り角力腕おしまねおしなんどしてうの小鋸ふて所々へ疵付そのうへまたをれか、りて板の間をくつろげ置いてひまを伺ひけるがいまだよき時を得む或夜一天墨を流し大雨志まりよふりければ忽ち一斗を按じ獄吏呼んでやけるに我今宵いかのゆへ母や腹中いたんで忍びがたし何卒温湯を

恵みたまへかしとやければ獄吏心得たりと一とんのさゆをわらしてごく
 の外かまへの小門をひらき錠を明て入来り五器穴より湯と出しければ才
 吉大さふよろこび一口吞けるが面をしめてやけるを恩人一片の芳志を
 めぐみぬふたまものおれどもうらむらくのまこまぬるし依くえらいたむ
 事まをく盛んあり願わくは今少もあつくしてぬわきかーとやけまを獄
 吏うちうあづき茶碗を乞取て小門の外へ出さりける才吉獄吏の出たるを
 見て急よ彼小賊と共ふ根太を引えおし無てゆるめ置たる柱何の苦もな
 くゆがめ獄中を出けるが外構への小門の最前獄吏が湯杖有た、めよ行け
 る時聞おうざりければ兩人おんなく遁れ出ける時の獄吏湯を持て来り
 たるが此躰を見て大さよ驚た大聲をえつしてありあふ獄吏をよびなれば
 四五人の獄吏手舟棒をさげてのがさくと打てる、る才吉事ともせむ棒を
 うばひ取て四方八面を打て廻り三人の獄吏を殺して欠出けるが又ひだつ



の大門ありきびしく戸ざしたれば出る事あたわむ門邊の高塀を兩人飛鳥のどく飛あがりまのがれ出けるが一躰此獄屋の城の内部を城門を出る事あたわむそのうち多くのとりてせ来り鎗長刀を以て諸々をかためたれば枝の小賊心あわて城門の控へ木より家根へ飛あがらんとて誤つて飛せんじ落る處をもじりを以てあらめらきぬ才吉の角櫓のまじへ道々るが大勢ふ追詰らきてまで捕へられんとする時才吉忽ち窮技投林といへる秘法を行ひ石垣に飛上ると見へしがその行方を見うしなふもこの塀の外面にすべて高山城々として鳥をかけりかたく道路崎駁あれば夜中なうく此所よりのよも避る事あさむじと捕手ら相議して急城門をひらき高提灯にて外城の土居柵のをりをうため城下深林の古廟の内までこさひよきおしついで行方を知らむと聞し召く大よいきとふりぬひ近國へ手分して普く尋ね求ると之扱も才吉の塀を飛こへ堀を渡つて平地をもとのめ

逃んとしけるふえや提灯松明万燈のどくのためされば此所と行事あたわむ闇夜風雨を犯してかの高山に攀葛を取藤をよぢて走る事壹里ましくやふやく平地に出来るが本道を行ひあしかりなんと濱邊を望んでひたすらえせたる忽ち官の渡へ出けるがまましく風雨をげく浦人風雨の備へをなしけるを才吉心の内は我をたづぬると心得陸地を行む沙も乗じて官の渡しとおよぎける沖の方よあしのおひ茂りたる所ふいたり此下にとままる事三日の禪のをし飯を潮みひとして渴を去のぎけるふ第四日の曉より天色えれて風波しつかえたるか沖の方を望み見るは微波連絶として漁歌棹々斷々續々たり才吉ひたすら伺ひ居るは西國船の順風は孤嶋を望んで来りければ才吉天の給ものなりと悦び再び海に飛入枝舟舟遊き付荷に取付て行は此舟その日午の申刻過舟濱松の舞坂へ着岸す才吉やがて荷をえをきて陸にあがり山林は入て身内の濡たると乾くし近邊を廻り

たるは林樹森々としていとまづかある山寺あり院内に上下五六人も有
 べき様子あり才吉先此門前より乞食となりて兩三日を送りたるがある夜密
 敷垣を乗こへ本堂より忍び入て銅鉄の類の佛具を取集め須彌壇の下に古
 皮籠の有けるを取出し悉くろの内よかとし入佛前の幡をたづしてまかど
 結び是を背負て竹藪の内に持行あつて、捨置たる体になし又垣を越て外
 へ走り出て門前をばげしくと、まかれは寺僧驚き走り出て何もあまむ
 深夜ふ来りて無禮をなまや才吉大骨よ呼あつて中けるは境内へ盗人入と
 りと見へて殊の外騒がしく音せり御用心あれかしと急がましく中くれむ
 蠢痴の愚僧らえ盗賊よと立さまざ本堂より至りて見るに宵母戸さしたる所
 みを明捨てあり坊主大さふ仰天し佛前ふ来りて佛器と見るは種々紛失し
 されば急ぎ松明をともして隅々分け入見るに古皮籠を捨ておいたり扱も
 と慌び聞き見るは皆寺中の佛具ありけまばやがて元のどく取入て門外よ

出く見るは盗賊を知らしめるに此四五日以前より門前より住居する乞食を
 り其時住僧聲と上げて盗賊の入たる由を汝えやくも知らせられたる其聲に
 恐れ盗取たる者を捨置て逃さりたれば寺中一物も失ぬざる事是と汝が
 一片の好身なり汝は何國の生れまいかあるゆへに乞食といなりしと
 問ひたれば才吉答て我の上方の生れありしが幼少より酒食ふおぼき親の
 金銀状多くうしなむてつひに家をおわれぬのどく淺間しき身となり侍
 るなり其餘り惡き病を得てかよふ見苦しきりたちとなりしは皆是父母
 の罰なりと涙と流してかたりたる住僧も哀れをもよふして中たれ顔う
 たち見苦しき共いまだ壯年の者と見へたり此庫裏母来りて住まべし
 重ねて偷兒の用心にもよかるべしと門内へ呼入々まば才吉大死よ歡び庫
 裏に來りたれば衣類などとらせけるは力業の五六人分もたたらさとのう
 へ幼年の頃々讀書せし事をまば憲曇梵書陀羅尼兒も寺僧の助けと成不ど

おれを重寶なるも乃やともてたやされおもわむ此所は年月を重ねけり爰に富家を檀家葬禮ありて金銀乃うつ物衣服べいこくの施物おふく集りしを見置てある夜とく盗取て賣代お金銀にかへく立退衣服刀劍母かへ三州を出奔するが道中にて人の物語を聞くは駿州久熊山に壹人の賊主あり名を久熊たるとよぶあまたの手下あつて近國をささぐがし専ら賊をなすと沙汰しなれば才吉大丸よるおび駿州に至り久熊太郎が幕下は屢しひまとうかひ打殺して自分賊主となり多くの賊の首領となるべしと連夜足よまるせてはしりたるが不日は駿州府中へ着しおれ賊主をとふは此間の此所の詮義つよきおゆへ武藏乃方へ逃たるよしなれば詮義おく先まばらく此所は足をとれんと府中の町家をうり醫師とあり賣藥店を開さける

卷之八

久熊山の賊主頭を鰐和尚よづる事

類を以て友を集るとむへある哉鰐和尚才吉を諸々ばう惡をなしく其郡國は長く居をしむる事あたはず此頃また此すん府へ来りまばらく町家に住し賣藥の札をかけ世間の光景をうかひ久熊太郎が音信を心がけたる千里の行路一步よりむむといへる丸ん言談もどかあしく例の惡心を生し土地の惡徒状あつめえよふをほしひまににして遊里へ通ひ放逐日々は増長して駿府にも住しがたく江尻の邊へ居と移しける此時かの賊主久熊太郎むろのし歸り来りて山中に隠居するよしと聞く才吉五六人のする者共を供につき深山にわけいり五六里を過て久熊太郎の山寨に入し門主を望み見るは立樹をまげて門となし山は添ひ川は依て堅固に要害をうまへたり才吉門前に至り塞主久熊太郎は對面せんと呼はりけきは小賊おれは何國より来りたるやとふ才吉聲とたけましている我いもとの江州の

生れよて鰐和尚才吉といふもの之汝は早く賊主に報ぜよといふ聲いまだ
 おろろざるに壹人の大男山刀の長さを横たへまゝと来りて門をひらけと
 呼ありければ小賊いそがあしく塞門をひらくの大男才吉が前よ来りて
 云けるに貴客山塞よ来りて何事をあさんとするや才吉禮をなして申々る
 我塞主乃芳名伏聞て蜀やうふたへを然るに此間武藏の邊へ行ぬふよし
 聞及びしよ又此山塞へあへり来りぬふ由我今日より塞主の配下となりて
 犬馬の勞母かあらんとまかの大男がいわく我の則久能太郎あり足下の宮
 の渡し母於く毒魚の腹を切ささぬひし鰐和尚にあらむや才吉がいわく則
 我なり久能太郎大さよ歡び寨中よいざなひて大酒宴ともふけ心中を語
 り合て共母よろこびたる久能太郎小賊を呼んで申けるに汝をみやうよ
 下りて酒店にうけたる班馬一羽は盗み来るべし席上肴つきたれに早く取
 来れ小賊かゝあまゝぬと出行けるが轡くして馳歸り久能太郎が前ふひさ

まづきて申々るに寨主の嚴命を受けて酒店に至り種々五風して盗とらんと
 せれども晴天日中なり一淺智のおよぶところ母あらむといふ太郎笑つ
 まいわく尤もなり淺智の及ぶ所よあらずと坐中を見廻し軍藏といへる者
 小向ひ汝は日中ふるの馬を盗み得べきや軍藏頭を垂て沈吟したるおよば
 むといふ太郎笑つて我配下よ名をなす者のあるまじといふ軍藏大さよえ
 ちて赤面を才吉かいまぐ某し初めて此寨中よ来り何も土産を持まひらむ
 多く寨主の饗應を蒙り我行て取来らんと席を立て出けるが轡くして大さ
 ある馬一羽とづさへ来る太郎大に歡び此馬の料いのほどありし才吉
 懐中よりえへぎ羅砂の紙入と銀子を少し出し出敷すべし量餘の少なき事を
 と笑ひたれむ太郎えともい笑ひて再び酒宴を催ふける是を始末として
 才吉種々の奸斗をなして盗み手ふ妙を顯わしたるければ久能太郎心の中
 ふ才吉を恐れ後々の我寨をも奪ふべた者ありと思ひければある夜久能太

郎才吉と友母家^{あやめ}は恐^{おそ}び入り金子^{かね}を奪^{うば}とりしう側^{そば}は長持^{ながもち}のふたをとりてありけるふいか仕^したり々ん才吉^{さいきち}誤^{あや}つぐの長持^{ながもち}の中^{うち}へ轉^まびいりかのが刀^{かたな}よてひとひをまたゝる母^{はは}打^{うち}たれば久能太郎^{ひさのたろう}引^ひ上^ある躰^{てい}をなして才吉^{さいきち}が口^{くち}ととるよりえやく長持^{ながもち}のふたをまゝ錠^{じやう}とおろして出^いでさしける才吉^{さいきち}少^せしも恐^{おそ}きを暫^{しばらく}伺^{うかが}ひ居^ゐたりしが人の足音^{あしおと}しければ爪^{つめ}を以^{もつ}て長持^{ながもち}のそこをひたすらうたならしけるは足音^{あしおと}段々^{だんだん}近くあるはまたがひあるひにかまならしし或^あるひはとゞまるは兩人^{ふたり}の聲^{こゑ}にて中^{ちゆう}けるは倉庫^{くら}の内^{うち}は鼠^{ねづみ}の入^いたると見^みへたりえやく火^ひをともし来るべしといふほどなく打取^{うちとり}来^きりて大き^{おほ}いおどろき賊^{ぞく}の入^いたると見^みゆるぞといふ程^{ほど}こそあれ家内^{かみ}の男女^{おんなにや}大き^{おほ}いさきとぎ立^たいまど速^{すみ}くゆくまじ追^おひけてとらへよとてんでお棒^{ぼう}をむつさけて皆々^{みな}外^がの方^{かた}へ出^いさりぬ才吉^{さいきち}をえかきあらしつ静^{しづ}りひたはら足音^{あしおと}をかんがへしが壹人^{ひとり}の同^{どう}く此^{この}長持^{ながもち}のふたを明置^{あけお}たると思^{おも}へたれか此^{この}内^{うち}へ物を

いれざるが鼠^{ねづみ}のいりしは此^{この}長持^{ながもち}の物のせんせぬ内^{うち}追^おまりそけんと錠^{じやう}をひらきふたを明^あけるやいあや才吉^{さいきち}大き^{おほ}いさきけぶ聲^{こゑ}一聲^{いっせい}長持^{ながもち}の外^{そと}母^{はは}おどり出^いけきば兩人^{ふたり}の男^{おとこ}大き^{おほ}いあまておどろた提^たたる手燭^{てしやく}と取落^とし尻^{しり}へまどふとまろぶ此^{この}時^{とき}才吉^{さいきち}あま合棒^{あはぼう}を取^とて手向^{てむか}ふ者を打倒^{うちた}し難^{なん}なく垣^{かき}をこへ塀^{へい}をのりこして逃^に出^いて山寨^{さんさい}は歸^かり太郎^{たろう}はま見^みへたれば太郎^{たろう}驚^{おど}き死^ししたる者のふたゝびよとがへりたる心地^{こころ}して其^{その}適^たれ来^きてし手段^{しゅだん}をとふは才吉^{さいきち}笑^{わら}つてうくのどき小事^{せうじ}語るをなすと決^けしてうらむる景氣^{けいき}なり々れば太郎^{たろう}才吉^{さいきち}が前^{まへ}ふひがま付^{つき}今日^{けふ}より足下^{そつか}をして我^{われ}此^{この}山寨^{さんさい}の領主^{りやうしゆ}とあまべし足下^{そつか}の智^ち謀^{ぼう}已^やれらぐ及^{およ}ぶ處^{ところ}ふあらむといふふ才吉^{さいきち}解^げいていふ我^{われ}諸國^{しよこく}ふ罪^{つみ}をかうし身をるくすべた地^ちふかりしが幸^{さい}ひす足下^{そつか}の厚情^{こうせい}を蒙^{かか}りし事をては三年^{さんねん}いかんを今^{いま}足下^{そつか}の主領^{しゆりやう}をすばあんなや太郎^{たろう}義氣^{ぎぎ}を感^{かん}づて再^{さい}三四言^{しよごごん}とつくして進^まめけきば才吉^{さいきち}今^{いま}の辭^じするあたあむ終^{つひ}ふ主領^{しゆりやう}とありまけりかくてろの夜

大さゝ酒宴を催ふして小賊らと集めて奸斗盜術を談じたるが小賊進み出
 て中けるに主領先半白日に軒下よりけたる班馬を取ひし術をいりなる
 斗り事なるや教へぬへとやければ才吉笑つに此術は何ぞ奇とをる母とら
 んや誠は盜術の初學かりいかある智斗ありても白日母盜取るのたし此
 馬をどらんとをるの先人の懐中の金子を盜取て其金を買時のかんがん
 の叔置鳳凰とても盜み得べしといふ小賊感服したる才吉充分は向つて言
 我此處ふ米つて三斗つらく土地の様子を伺ふ田中の城下を去る事十
 四五丁ふして山あり此山に登る事八丁爰は寺あり半里計り麓に在家あ
 り是此寺の守りて領地あり顯密二教の道場ふて普財の御子なきは行て
 働くべしと小賊八九人信徒の仕立ふてその身の醫師の形ちとなり密に山
 寨を出てのしこ母至り登山し関東をじより西國へ通る者なりといつわり
 住寺は對面し本尊の不動へ初穂として金三片を備へて住寺えさましく齋

應しければ才吉四方山の話しの敵にやけるは此所にかく人里遠く盜賊あ
 んどの患ひある時如何しなふや住寺答へてやけるに當山の魔所よて盜
 難有事あり依て山門も夜る戸ざを事おし是まつたく不動のかごよる
 べいされども若危急の時何れを早鐘をつく時麓の在家皆集る無ての約
 ありとやたる才吉大に感したる体にて誠は靈顯あらたある明王の功力な
 りとて下山しぬ其夜賊十余人を隨がへるの山寺に登りて鐘樓の撞木を切
 落し住僧下人まで残らぬいましめ壹人の僧ふ案内させ金銀財寶の有處を
 とふて悉く盜取馬に付て下山しけるをべく村里の富家寺社等へ押入時
 いつも武器を用ひあら繩を多く持たし場所は依て馬舟等迄備へけるとぞ
 才吉常に手下は向つて云盜人ありとていやしむべからむとて戰國おら
 ば武勇智謀を以て國の主とをあるに袋の内状さぐりて物を出すよりも案
 しゆへに我此活斗をもよふして心さらし恥を語りける斯のどき強賊も

又多のらむ

卷之九

番婦毒舌豪家を欺く事

才吉深夜江尻を鬧き事

積善の家よ餘慶あり積惡の家よ餘殃あり善をまふ者惡とおすも乃報應ある事遲きとはやきとによるのみ扱も鰐和尚才吉毒舌あく石山寺より始りて三十貳才の星霜を経るといへとも幸ひよして所々の危難と免き惡名諸々まかくれなし三才の小兒もつまはトきして鰐和尚の名状よく受けり又尾州の領主よりも國々へ多くの捕手を出しさがし求るといへ共鰐和尚のふかく山中に居をしむるがゆへふあへてその居所をうる者なりあ、ふ又江尻の里に一軒の豪家あり世々の造り酒屋にて家内多く召仕ひ往來の旅客此家に入て醉をつとささる者なり其名近國ふ聞へかくれなき富氏

あり且て此家に此頃壹人の婦人白木を以て清らかみ作りたる酒樽一壹升も入るべきを持来りて毎日時刻もちがへむ黄昏の頃来りて酒を買て歸るあり然れども何くの女なるは知らずある日酒つぎ誤り持来りし樽へ泥をつけたる故ふ水をもつて洗ひ落し酒を汲んで入ると女いそがわしくおしどめていふ其樽をて泥の爲に織きたり我また外にあたらしき樽を持来りて酒と買んといふて外面よせさる酒つぎら皆々あつと笑つていたりける亭主つらく此ありさまを見て此婦人たゞ者よ何らむかあらを深き縁故あらんときし置けるに次の日も又例のどく樽を持来りて酒を買んといふ亭主自出て彼樽を受取ひうかふ爪を以て印をつけさあらぬ体て酒をつぎま渡しなるが又次の日も来りけきは亭主則かの樽と受け取く見るにさのふ爪印したる跡曾てなし是は依て大ふうたがひを生し此婦人いかなれば日酒をかふ事よのどく新らさき樽を持来るやかれが

没書 魚利治實記

歸る跡とつけ其行術を見届んとひろかよりの婦人の歸る屍へよした
 がひ行ふ江尻の町をえなれて兒梅の濱邊に至りて忽ち海中に飛入て行方
 なくありぬ亭主大よおどろき是必龍神の化身ありと恐れつゝもてさら
 よ人よもかたしざりしが其後いさらふ来る事おし數日あつてたそがれの
 頃又例の婦人來りまいそかしく酒を買てさる亭主またぞろ其跡よまた
 がひて此度の其酒と乞いよきをどわんと思ひければ濱邊ふ至りて人の往
 來なき状伺ひ聲をかけて呼かへさんとせる處にかの婦人うしろをきつと
 うへり見て大にいられる顔色すて汝いかをきば一度おらち二度まで我跡
 母したがひ來るや亭主いそがしく婦人の前よひぎまつきてやたるに神
 人まづいかりをやをぬへ君このごろ我家よ來りぬふ其舉動歌然として人
 界の氣ふあらざる事をしるかゆへは陰影をじとひて密に伺ひ奉る母いた
 しま此海中母入りぬふ爰ふ於て我君も是海邊の神なる事と知るあまれい

ゐある明神ふて渡らせぬふやらんねがごとく告知せぬへかの婦人答へて
 いあく我えこき河泊神よ仕る宮女なり人界ふて是を龍女といふ河泊神元
 より酒をこのきて我をして酒を買しむ我水府かくれおして河泊見るより
 陰神なりゆへは日中の太陽の精盛んあるがゆへは金鳥西峯ふかたむくを
 待て人界ふ出て酒をもとむ然れどもその酒屋の主人の正直あると酒造り
 方清浄なるとよあらざまは是をもとめ汝がうまれすでお正直よして然
 も酒けつむくおまは汝の家母て酒を買ふおえかろざるよ汝は先母我跡に
 したがひ來りて海水ふ入を見たるがゆへは母しむらくおんが家よて酒を
 もとめざりしが此國中にまべて汝が家の酒ならで河泊神のもとむべき
 酒なし猶も身をつゝと善状なをもべし神道よ汝が家を守りて福をさつけ
 もろくの災難とのぞき子々孫々母至るまで長壽ふよ繁榮ならん毎月
 晦日の夜神人海中を出て人間よ遊びぬふ其夜かおらす清浄の家よいたり

て酒と求て其家より幸ひをあたへ福をさづく當月晦日あらむ汝が家母遊
 びぬらん汝は神人の来臨を願はばうあいを清浄ふもふけてたまはく燈
 燭をもふけて荒蕪一席を上段に敷かかると是神の座をもふくるに猶も
 家内の人を遠ざくべしかまゑてうたがひを生じ他人より此事をもらまぬ
 て神をまつ忽ち汝は身に至るべし夢くうさかふ事あるべからむと言
 終りて神女の海中に飛入ぬ酒屋の主人は跡ふかかみて大に悦び晦
 日に至るあらば神人を拜して子孫長久家内安全繁昌を願わんと家より歸り
 一日千秋の思ひをたしその日の至るを待けるがや晦日もありし
 家内の従僕を呼んで思ふ子細あきばとて明朝迄悉くいとまを遣はし
 づから家内を清めくおしへのどくあらどもを敷てともし火をかびた
 しとくかへげて其身にもくよく齋をいして麻上下を着し神人の来りぬふを
 ど待たる扱夜ふけ人しづまりてかの神女門戸をたゝきて只今神人のいら

せぬふを呼あてければ亭主いそぐあしく門戸をひらくほどこそあれ神人
 只今あんが家より幸ひを與ゆるぞと呼りて大の男貳十人斗り刀をひつ
 ぎけ一度どつとこみ入たり亭主大に仰天し扱に賊ふさばあられた
 と大音をあげくやれ盗賊よくと呼われども元来此家の濱邊に向ひし離
 家なり家内の者の悉く家よりあらむとふよく居たり壹人
 の賊えしり寄る亭主を高手小手ふいまめ金銀財寶はいふ及ばず家内
 の一物も残さぬをみ取て行方知れを成なる此酒屋の亭主生得大徳無
 道の人成りしゆへ神女が福を與へんといふより大徳を生けてかへつく賊
 の爲にあさむかれけるぞ是盗人のいかある者ぞとなれを別人よりあらむ彼
 鰐和尚才吉久能太郎が輩として無て壹人の髪と頼みて神女といつたり日
 毎酒を買しめ海へ入てあやしき姿を俗眼をおどろし終りてこの事成
 就してあまた金銀財寶を奪ひ取りまがみお是鰐和尚が奸智より出たると

卷之十

姉を尋て助市江州に至る事
助市が勇鷲和尚等を討事

君父の仇母にともふ天をいたゞうすと扱も江州の娼婦初花が弟助市にい
とけあふして姉ふ別き姥が家よやしなまされたる生れ得て父雪柳齊り力量
とうけつぐよや刀劍を好み柔術捕手をまゐびたるよ十五才の頃にはや其
玄妙を悟りしうは諸家より召抱んと使者門前よたへをといへども助市姥
の物語りを聞母父齊藤雪柳齊の竹内大記といへる者の爲ようたれぬひし
と常く物語りしけせば赤心ふ留ま忘れぬ中々母主取せず後讐のさあそ
とあらんとてあへて諸家のまねきふ應せよ十八歳のたる旅の用意をと、
のへて姉の行衛をいたふて江州を望んで急ぎけるが不日よししく大津の町

に至り所々尋ねもとむるよかつてそ乃行衛しれをむあしく所々の風景を
眺め琵琶湖の邊ふいたりてひとをら我身のたぐめひを歎息し心の内よ
思ふよふ我効少母して父母よえおれ壺人の姉状とづねてはるく此國よ
至りしに専ら報讐の事をえうらんが爲あり然れども其のひなく尋る姉母
もあつてもよしや此上の運を天ふまゐせて姉の行衛を尋て然ふしてのちふ
くうの事を斗らんと頭をうへして旅籠屋の方をのどんで来りたるが日
にはや西山よ落て四方賑々どく怒ち道よまよひけれを助市心あはて西
の方を望んで行所よ林の中よ火の光り見へなれば定めて人家あるならん
と伺ひ見るよはたして一軒の草庵あり助市よろこび扉打た、きていふ某
の遠國の旅人あるが道よふまよひて方角をうしおへる願わくえあわれ
みをたれて一夜をめぐみぬへと呼りたれぬ内か壺人の比久尼手よ念珠
をつまぐて口よ彌陀の法号ととあへて出采り扉をひらき助市がよふまを

とくと見て遠國の人道母まよひてさぶかし難儀あらんこゝへ入て一夜を明させぬへといふ助市禮を奉して内よ入座し付あさりを見るふ正面ふ觀音の畫像一幅をかけ香花燈燭を備へ前よ一軸の經文を置彼びくに助市ふ向つて中たるの客の何きれ國何國をさして行ぬふや助市答へていふ某の武藏の國の者あるが壹人の姉此國にさまよひ來りて煙花乃中身身を沈めいへし姥が物語りよて承りたるくたづね參りし其かひあくと却て知るものもいあむと涙を流して語りたれむくの尼いふよふ若や旅人の名は無藤助市どのとわやさむや助市おどろき大尼いうゝして我名をしりぬへるやといぶうれば尼も涙をたらくと流し扱の旅客の助市殿おておわしけるか我身の此大津の町大和屋といへる娼家のうのま女なりうき河竹の内よりきをうたりつらきとともよまぐさめての姉妹の約をなせし初花といへる武さりの國の生れにて父の齊藤雪柳齊といひし由又壹人かの弟を

もてり助市とよぶと常々の咄しなりしが貴客のおもぎしよく初花どののふ似たるをへ若るうきうと尋しよたしてたがまざりし其後初花どののえ同ト里の遊人才吉といふ者の家よ嫁しぬひしがいかふるゆへう知らね共才吉初花殿を殺害して行方知ますありぬ我大和屋も怪しき事どもありて家内残らむ死失たり是は依てあらは世のたかなき事を思ひつゞけ終一念併さんまいの身となり侍りぬとかたりいとど涙よくれにたる助市姉の才吉が爲に殺されし事を聞かぬと且怒りく大尼乃厚情ふより其縁故のさとり得たりかの才吉とやらん今何國母忍び居るや知りぬまやかの尼こたへま君の未だ知りぬあすや今専ら大公より詮義ある鰐和尚才吉ころ則其人なりといふ助市ふたゝびおどろき扱に此旅中は風聞せる鰐和尚の我姉の敵なり然らば今久能山に寨をたまへて遠近をおびやかま盜賊は主領ふていかよしさもあらばあれ恨の刃思ひ知らさむ置べきかと夜の明る

をもまたを尻にいとまが告て功成の後なるを拜顔をとぐべしと又東路
 さして急ぎける扱も鰐和尚才吉久能太郎と山寨ふこもりて専ら盗賊を
 おしけるが天罰よのがれ得を山寨の忽ち官兵の爲よ責落され小賊悉く捕
 籠とあれを鰐和尚今口是までなりとて久能太郎諸と大太刀を真向よさ
 一のざし捕手のむらがる中よ欠入てあたるをさいわひ切て廻り一方を切
 破りてえせ行處にたからを齊藤助市よ行合たり助市眼を定めて前面状見
 るよ壹人の大男面の鬼のどくなるが血刀をひつきけて馳来り助市大音ふ
 呼あつていふ来る者の鰐和尚才吉よありむや我の汝が爲よ江州ふ於て手
 よう、そ一齊藤雪柳齋が娘初花が弟助市あり今此所ふて行合しよ天我ふ
 汝をぬありしなりよこ引おと呼あつて刀を抜て切てゐる才吉も心得た
 りと秘術をつくして切結ぶ時ふ久能太郎聲をかけて兩雄暫らく戦ひやめ
 よと貳人を左右に引わけ助市よ向つて言珍らしや雪柳齋が御子息助市殿



雪柳齋の御子息助市殿

御邊幼少のせつなきば我面体の見知るまじ先年雪柳齋をひろか討て立
 退し竹内大記なるが先我と勝負を決して命あらば後に鰐和尚と勝負せよ
 助市是を聞て天母も登る心地して叔の供は天をいたゞかざる父のあどお
 る竹内大記よなど力足を踏ならしはつたとよらんで立たるの實は勇々敷
 を見へよける鰐和尚は大小不審をなし我江州はありし時密に斗つて伏見
 や半次といへる者を殺害おしたりががかまが懐中に竹内大記とかまける
 劍術の目錄ありしゆゑに初花と共おあんに敵を打たりと思ひしが足下自
 ら竹内大記と名乗のいかなる縁故あるや久能太郎が曰く其半次とやらん
 母左りの小髪は一寸斗の疵の跡あるや才吉の曰くたづの跡あり然るふ
 右の眼尻は大きなほくろあり太郎が曰く思ひ出たり武藏の國はたゞ雪
 柳齋を討て東海道よさしものりし時壹人の旅客と道連となりしが何ぞ斗
 らん此旅人の是盗人よて一夜我寐入たるを覗ひ路金の云よ及す衣類道具

悉くうばひとり逃さりぬ是よりして我せんかとかく盗賊とかりて世を渡
 りぬ思ふ母其半次の其時の盗賊あるべし我名を書きたる劍術の目錄も此
 時失なへり鰐和尚是を聞て歎息しく曰く嗚呼恐るべし陰惡半次盗賊な
 りと是を知らむといへども天道是をゆるしぬわを我手をうてく罪しぬふ
 我が兩人あまた年月盗賊をわごとなし忠臣をいとわを孝心をさらわす
 多くの良士をそこなひて天の責遣んとするも道あるまじと云終つて兩賊
 ついに助市が爲母討れたり時大勢の捕手追よえせ来りて助市がひる
 いな死働らきをせうして生捕の小賊を引出し悉く首をたね梟木よさし
 て其暴惡を衆人おあまねく示しぬひしとあん噫天網恢々疎母して洩さむ
 冥單才吉のみあらんや世人鑑みむんむあるべからざるなり人の性の素よ
 り善あり才吉よ最期其本善の善母歸ると雖ども時期最遅し才吉の
 才を以て仁義の道を行ひしめい美名を千載に輝うまべきに夫は反し
 暴惡邪慝を逞し惡名を後世に残は嗚呼恐るべけんや謹まざるべけんや
 鰐和尚實記 大尾

明治十九年十月廿日御届

全 年十一月 日出版

定價金五拾錢

麹町區飯田町二丁目五十四番地

編輯兼
出版人

水野 綴 太郎

發 兌

右同所

榮 泉 堂

馬塚町貳丁目

山口屋 藤兵衛

横山町三丁目

辻岡屋 文助

本石町二丁目

上田屋 榮三郎

南 鍋 町

兔 屋 誠

淺草黒舟町

廣 野 仲 助

全 三好町

大川屋 錠 吉

東京
飯田町

東京
堂

東京
飯田町
飯田町

東京
飯田町

東京
飯田町

東京